

## 中学理科の先生の放射授業報告会を開催しました

当協会では、全国中学校理科教育研究会（全中理）の後援をいただき、中学校の理科の先生方を主な対象とする「放射線授業・支援実践報告会」を6月22日（土）、東京の虎ノ門で開催しました。



当協会にとり、学校の先生方をお迎えするこのようなイベントは初めてでしたが、中学校の理科の先生や、教育委員会関係者、放射線授業をサポートされている原子力関係者等、発表者・事務局を含め、参加者は想定を上回る40人となりました。

土曜日の午後の開催にもかかわらず、参加者は、活動報告に熱心に耳を傾け、真摯な質疑応答が繰り広げられました。

この報告会は、2つの目的で開催しました。

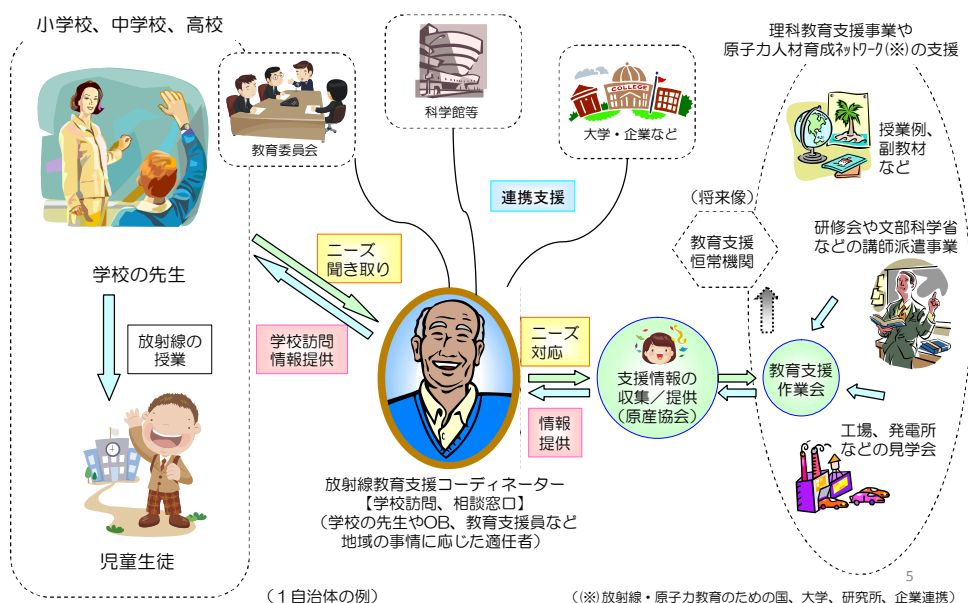
- (1) 中学校における放射線教育の普及支援
- (2) 放射線教育支援地域コーディネーター構想の普及

学習指導要領はほぼ10年ごとに改訂されていますが、平成24年度から、中学理科（3年生）で、「放射線にも触れる」こととなりました。このため、理科の教科書には、発行会社によって半頁～2頁程度、放射線について記述されるようになりました。

ところが、40歳より若い先生方は、ご自身が学校で放射線について学んだことがないという実情があります。また、福島原子力発電所事故により、放射線についてどのように生徒たちに教えたらいかが悩んだり、教えることをためらったりする先生方もあるということです。このため、先生方が授業で放射線について教えるための参考になればと思い、この報告会を企画しました。

また、教育現場と外部機関の連携の橋渡し役として、コーディネーターを配置する構想を原子力人材育成ネットワーク初等中等教育支援分科会事務局として当協会が提案していますので、報告会で紹介しました。

## 放射線教育支援地域コーディネーター構想 (添付) (標準モデル素案・将来像)



発表の概要は次のとおりでした。

- 八王子の若手教員：教員研修会で学んだ後、放射線について教えているが、震災後は生徒の関心が安全にあるため、放射線についてどこまで解説するか課題と考えている。
- 横浜の若手教員：震災後、同市が文部科学省放射線副読本をもとに教材を作成し、教員研修、児童・生徒への授業実施を全小中学校に指導したことを受けて授業をした。
- 郡山のベテラン教員：震災後、放射線から身を守り助け合って暮らすことをめざした授業を行い生徒に発表させ、他教科とのコラボも行った。各地に招かれ放射線授業実践について講演しており今回が 30 回目となり、今年は韓国でも講演した。
- 仙台の中学校長：震災前から放射線授業を行っていた。現在は教員を指導する立場にあり、今年初めに教員研修会を実施したが、同市では震災後も放射線教育にあまり関心が高くない。福島とは温度差がある。
- 美浜のエネルギー環境教育支援員：同町では震災前からエネルギー環境教育を全小中学校で推進している。教育支援員として、学校の先生を訪問し、情報提供したり相談にのったりしている。但し、周辺町には広がっていない。
- 全中理会長：今後の放射線授業は、基礎知識、影響、利用を含め、気をつけて使っていくと教えるために学活、総合、理科、技術家庭等で扱いたい。

このほか、日本原子力研究開発機構 量子ビーム応用研究部門 研究主席の小林泰彦先生から、「放射線利用の最新技術～工業、農業、医学利用に共通する放射線作用の基本原則とは～」と題する特別講演をいただき、参加者は興味深く拝聴しました。

当協会としては、今回の報告会開催を通じて得られた教育関係者等とのつながりを大事にして、今後の活動に結びつけていきたいと考えています。(以上です)